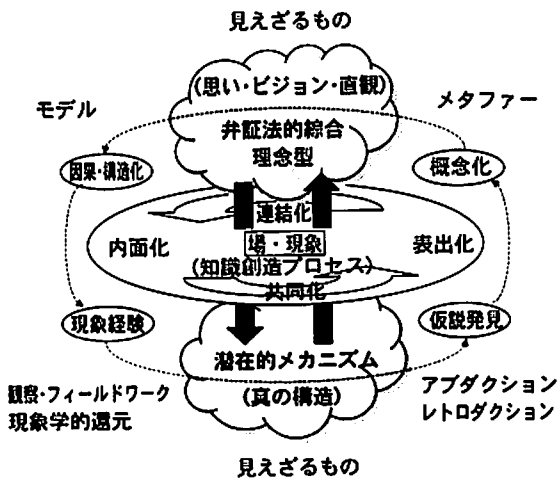


社会科学にみる知識創造の知

第二部



さて、私たちは第一部で、伝統的哲学の知を手がかりに、主にそのプロセスに注目して知識創造とは何かを論じてきました。そこで、知識を生み出しつつ、個や組織が発展していく総合的運動として紹介したのがSECIプロセスでした。その創造の過程で今回最も重視するのは、表出化 (externalization) (五八ページ参照) だといえます。表出化は暗黙知から形式知へ、という異なるタイプの知識への変換であり、その中心においてコンセプトの創造という、多大な知的エネルギーを要請するものだからです。

そこでこの第二部では、知の現場でいかに意味や概念が創造されるかに着眼して、社会科学の知について見ていくことにしたいと思います。なぜならそれは社会科学が人間社会や経済現象の把握や分析、理解や説明を目的に、人間の意図、動機や価値観などの「見えざるもの」を見、あるいは創り出していく知の方法論であるからです。

諸説ありますが、社会科学とは、近代科学を自然科学、人文科学（人間科学）、社会科学に分けてみたときにその三番目の範疇に入る、社会学、経済学、経営学、法学、政治学などの総称です。ただ

し、これらの分類は明確ではありませんが、なかでも社会学の方法論に重点を置きたいと思ひます。それは自然科学のような実験のきかない、社会現象の方法論の確立に最も苦勞してきた学問分野だと思はれるからです。

以下ではまず、〈1〉科学の知の方法論のタイプとその時代における意味合い、変遷について概括します。そこで「ノート」として哲学との接点である現象学について触れたいと思ひます。次に、〈2〉社会学を中心として人類学（フィールドワーク）、現象学的社会学などの知の方法論について見ていくことにします。さらに〈3〉「見えざるものを見る」うえできわめて重要な認識と思はれる、経済学の分野に台頭しつつある「超越的实在論」のアプローチを紹介します。〈4〉こうして、さらに経営学にいたるまで、社会科学の知を横断していくことにします。

科学の知の方法論の意味合いとその変遷

伝統的知の方法論——演繹と帰納

近代科学は自然科学から確立されましたが、そこには伝統的な方法論としての論理学がありました。これは古代ギリシャのアリストテレス以来の伝統です。この代表的なものが演繹論理 (deduction)、いわゆる三段論法です。演繹は、その形式だけに基づいて、一般から特殊を推論することです。たとえば、

「すべての人間は死ぬ」(大前提)

「ソクラテスは人間である」(小前提) (という二つの前提から)

「ソクラテスは死ぬ」

という結論を得ます。演繹的な論証においては、前提が真なら、結論も必然的に真とならなければなりません。きわめて論理的なステップです。最近もこうした理論的論証に基づいて仕事をすすめるというところで、さまざまな論理的思考法などが紹介されています。ただし、三段論法はあくまでその

形式に注目したものであり、それだけでは現実の知的業務には実効がないのではないかと思います。たとえばデカルトも「方法序説」のなかで、論理学は、その三段論法も他の大部分の教則も、未知のことを学ぶのに役立つのではなく、むしろ既知のことを他人に説明したり、知らないことを何の判断も加えずに語るのに役立つだけだと批判的に語っています。

一方、逆に特殊から一般を推論するのが帰納論理 (Induction) です。目前の経験的事実を一つ一つ眺めて共通する法則性を見出す、数列から方程式を導き出すのに代表される方法です。しかし、演繹とは異なり、帰納においては、前提が真だからといって、結論が真とは限りません。したがって、帰納論理は厳密な意味では論理とはいえないのです。とはいえ、演繹論理だけでは、いくら三段論法で正しいといっても、前提を超えることのない論証を試みても新たな発見などありません。そこで他方には、実験から理論を積み上げていく、実証的方法として帰納論理があるのです。

データから理論へという研究法の試みは F・ベーコン、J・S・ミルを経て完成され、現在は統計学的アプローチとして利用されています。具体的な事実のデータから、一般的原理を導き出そうとする帰納は経験主義の方法だといえます。逆に、一般的原理から個別的原理を推論する演繹は実証主義の方法だといえます。

実証科学の限界を超えて

演繹と帰納は、それぞれ異なる方向性を持った知識抽出のアプローチだといえますが、両者のいず

れかが正しいかという問題よりも、それらが組み合わさってできた科学的方法が限界を持っていることが指摘されていることに目を向けておきたいと思ひます。

科学の世界では、すでにより大きな思考の転換が起きていることに読者も気づいているものと思ひます。それは一七世紀以降支配的になつてゐる、実証主義的なサイエンスからの変換です。実証科学 (positive science) とは、実験に基づいてデータを集め、限定されたなかで数量化を行い、「実証」された関係のみを有効として、さらにそれを他の事象にまであてはめていく、という考えに基づいてゐます。しかし、これは過去の話でなく、たとえば経営学においても同様に、企業行動や競争を数量化し統計分析をつうじて仮説検証して戦略を決定するといった考え方は依然として根強いのです。科学哲学の世界では、こうした要素還元主義的、実証科学的アプローチに対して、一九世紀末から二〇世紀のはじめにかけ、さまざまな反省が投げかけられてきました。

すでに、プラグマティズムの創始者である米国の哲学者パースは、科学的認識は、**仮説推論 (abduction または廻行推論 retrodution)**、**演繹**、**帰納**という三段階をスパイラルに辿ることで真理が探究されると考えていました。こうした、**演繹**、**帰納**の両者を統合、あるいは超えていく試みが、自然科学の分野でも最近になつて関心を集めています。それは演繹でも帰納でもとらえきれない、現象の背後にある真理を把握しようという試みなのです。

現代英国の経済学者、トニー・ローソンは演繹、帰納、レトロダクション (廻行推論あるいはアダクション) を次のように説明しています。

演繹（ディダクション）は一般から特殊への移行である。たとえば、「もしカラスはすべて黒いなら、次に現れるカラスも黒いであろう」または、「すべての銅が電気をよく通すなら、その断片は手に電気を伝えるだろう」といった論理である。

帰納（インダクション）は特殊から一般への移行である。「今見ているカラスが黒い、ゆえにすべてのカラスは黒い」または、「どの銅の断片も電気をよく通す、ゆえにすべての銅もそうであろう」といった論理。

逆行推論（レトロダクション）は（現象だけ観察して法則とする帰納や命題を鷓呑みにするような演繹とは対比的に）、観察された現象のレベルとは異なる、より深いレベルへの説明の移行である。それによって、原因となる因果メカニズムを明らかにして現象を説明する。たとえば、「カラスは黒いという観察から、（なぜカラスは黒いのかという）黒くなる内在的メカニズムへ遡った説明」であり、または、「銅の断片が電気をよく通すという観察から、内在的なイオン伝導に関する、銅の持つ伝導性の本質的構造へ遡った説明」である。

(Lawson, "Critical Issues in Economics as Realist Social Theory" より引用者訳)

ここで問題にしているのは、「実証」が本当に確かなものなのか、ということに対する疑問です。これまでの実証主義的科學は、実験や経験（すなわち帰納）に基づいて「真理」に近づき、知識を獲得してそれを一般化する（演繹）というスタンスをとってきました。しかし、個別的な実験や経験が普遍性を獲得するには、本来どのようなプロセスが必要なのでしょうか。

実験は、つまるところ科学者にとっての特異の経験 (experience) だといえます。それだけでは、「現実」でも「真実」でもありません。それは社会的に示されあるいは共有された事象 (event) となった時点で、つまり人々がそれぞれ確認した際に、現実となっていくきます。しかしそれだけでもまだ「真実」とはいえないのです。事象の背後にある、メカニズムを把握してこそ、真となるといえるのです。

このように、実は、「現実」にも階層があるのですが、実証主義においては現実を実験と直結して括ってしまっていました。けれども、本来の科学の目的は、表面的なデータや実験結果の収集ではなく、現実のより深い階層に隠れたメカニズムや法則の解明にあるのではないか、という反省や自覚が投げかけられてきたのです。

二〇世紀も終盤になってから、こうした転換がより鮮明な形でエジンバラ大学の科学哲学者のロイ・バスカーにより主張されました。それは、現実の深層に潜む真のメカニズムを直観的に把握して現象を説明しようとするアプローチで、「**超越的实在論 (transcendental realism)**」(または批判的リアリズム critical realism) といわれます。

超越的实在論とは、(実験室でコントロールのできない) 社会的現象というのは、私たちの主観を通して仮想的に「存在」する(してみえる)のとは別に、独立した真の客観的な存在を持つのだ、という考え方です。つまり、私たちが社会現象を観察あるいは認識しようとしまいと、社会的現象はそのものとして存在する。すなわち、人間がある社会的現象を頭の中のイメージで形成しているのでは

表 2-1 経験、事実、実在と真実

	実験	事象	メカニズム
経験 (エクスぺリエンス) の領域	✓		
事実 (アクチュアル) の領域	✓	✓	
実在 (リアル) の領域	✓	✓	✓

(Bhaskar, *A Realist Theory of Science.*)

く、社会的現象にはそれ自身としての特定のメカニズム、パワー、傾向が存在する、というものの見方です。したがって、表(最下段)にあるように、知は、実験、事象、メカニズムの各レベルを経て、はじめて、真実に至ることができるというのです(表2-1)。

知の危機を乗り越えるために

社会諸科学は二〇世紀になって発達してきた「現代の知」ということができると思います。西洋近代の科学的合理主義が二度にわたる大戦とその後の冷戦構造の中で行き詰まりを見せるなか、二〇世紀初頭に哲学や論理学、物理学や数学などの分野でさまざまな新しい知のスタイルが登場しました。暗黙知を提唱したポラニーは、近代合理主義に対する現代知に不可欠な視点として、真理が持つとされる「客観性」が実は幻想にすぎない、と指摘したのでした。ポラニーについて論じたりチャード・ゲルウィックはその主張を次のように要約しています。

現代世界にとっては、知識の客観性の理想が科学の方法であり、また真理の認定証であるということが確信されるに至っているのだが、その実、そうしたことは科学で実行されていなければ、真理を打ち建てる力もないのだ。客観性の理想の魅力というのは、つまるところ、責任ある参加・

実践（コミットメント）の代用物として事実をもちこむことにあるのだが、この代用が真実の代替でなく、えせ代替である、つまり、冒険も価値もなしに知識を保有するという外観を与えらるのだ。

（ゲルウィック『マイケル・ポラニーの世界』長尾史郎訳）

そしてポラニーもまた、パースがレトロダクションと呼んだ仮説創造の重要性を「洞察」という言葉で言い表そうとしました。⁽¹⁾

一九世紀末から二〇世紀はじめにかけては、他の科学の分野でも同じようにこうした新たな知の革新が起こりました。たとえばドイツの理論物理学者、ヴェルナー・K・ハイゼンベルク（1901-76）の創始した量子力学の登場があります。量子力学というきわめてミクロな世界では、観察者の存在自体が、対象である現実を変化させてしまう（波として観察すれば波に、粒子として観察すれば粒子に）、ということがハイゼンベルクによって証明されました。つまり伝統的な主観と客観の整合性が崩れ、従来とは異なる世界観を私たちに気づかせたのです。

それらは、いずれも、それまでの西洋における知的危機を乗り越えるためのものだったといえます。現代の知は、ポラニーが主張するように、真理には主観的コミットメントが必要である、ということにいずれも配慮し、科学の万能性や合理的な世界観という近代西洋的な知のあり方をなんらかの形で批判、再構成する視線や切り口を持っています。その象徴的な例が現象学の方法だといえます。E・フッサールは実証科学を批判しつつ自らの哲学を打ち立てましたが、そこでは伝統的な主観と客観の関係が根本から問いなおされました。

【フート 現象学——経験から本質直観する相互作用の知】

日常を疑う

何気ない私たちの日常。その日常は一見空気のように気づかれずに過ぎていきます。しかし、日常は本当にそのように流れすぎていくだけのものでしょうか。

私たちの日常にある知覚対象は、私たち自身が自然に構成しているものです。たとえば、目の前にサイコロ（正立方体）があったとします。それを正立方体と認めるには正面の四つの角が直角で四辺が等しいことを確認しなければなりません。実際、目の前のある面は台形や平行四辺形に見えている。それでも私たちはそのサイコロの側面を見ることなどによってそれを正立方体として見ます。その「見ている」という行為は根源的には何であるのか。それが現象学の祖、フッサール（1859-1938）が現象学を開始した際の着想⁽²⁾でした。

フッサールは現象学によって、日常的対象（これをフッサールは「生活世界」^{レベンスwelt}と呼びました）に潜む哲学的な問題に私たちの目を向けさせました。フッサールの現象学は「論理学研究 第一巻」（1900）によって開始されました。現象学は一九世紀までの実証哲学の批判から生まれてきた、二〇世紀の「知識論」だと考えられます（それまでの文脈でいう「哲学」とはいえないかもしれないからです）。



一九世紀当時の科学は、経験主義と実証主義が成功を収めた結果、数学や論理学に象徴されたように現実性を失い、空虚さを増していました。フッサールは、これを「理論化の地盤喪失の脅威」、「ヨーロッパ諸科学の危機」と呼んで、数学や論理学の始原を回復しようと、現象学を構想したのです。

そもそも科学の基礎はわれわれが直接経験できる日常生活世界にあるというのがフッサールの考えてした。出発点は、自分の内面に映る主観的な世界です。ただし、直接経験は科学や学問において忘れられてしまっている。その原因は「客観的」に事象をとらえていく経験科学的思考にあると考えられました。たとえば幾何学 (Geometry) は測量術から生まれました。測量術はエジプトで毎年のナイル川の氾濫の後の整地のための測量を行うという生活上の必要から生まれました。科学、とくに自然科学は真・善・美といった主観的価値を排除することで発展してきました。しかし、生活世界におけるこうした価値の追究こそが、本来の学問の目指すべきものだと考えられます。アインシュタインの言葉を借りれば、「科学全体は日々の思考の洗練以上のものではない」のです。フッサールは始原的な主観的光景こそが、学問や科学にとって根源的だととらえ、そこになんとしても立ち戻らねば（還元しなければ）ならないと考えました。つまり、それは、直接経験を外部から眺めるのではなく、その内部へと還元することだったのでした。

現象学の方法

フッサールは、デカルトと同じく、ただし違ったやり方で、さらに自らが「厳密な学」と呼んだように、デカルトよりも実践的に、私たちの世界の根本的な原理や、疑いの余地のない真理は何かを探究しようとした。フッサールは、知識が私たち（存在者）の主観の中でどのような現象として現れ、体験され、知識として構成されていくのかを分析し記述するものとして、自らの哲学を位置づけました。この過程は現象学的還元と呼ばれます。

それはまず、エポケー（判断停止）という方法からはじまります。どうということかという、私がいま行っている行為や判断をとりあえず止めてしまふ、ということですが、エポケーは、カッコ付けあるいは「カッコに入れる (bracketing)」ことだともいわれます。私たちははいやおうなしに日常生活において、日常という行為や流れの中に埋没しています。それは習慣的行為であったり、社会的行動規範であったりとさまざまですが、私たちは知らず知らずのうちに、それらの慣性の中に浸って生きています。こうした状態では、いまここで直面している出来事ありのままに冷静に見たり判断したりすることはできないのだ、といっているいいでしょう。たとえば、朝起きて、顔を洗い、食事をして仕事に行く……。こうした流れの中で、本当に私たちは自分自身のあり方を認識できるのでしょうか。何かすでにある考え方の枠のようなものに沿って流されて生きていく限りは、いまの本質や、新たな自分のあり



ノエシス(意識作用)→(認識)→ノエマ(意識対象・意識内容)

方を見ることは難しいのではないのでしょうか。そこで、いまここで私が行っている認識、行為や判断をカッコに入れる、いわば私たちの日常世界というビデオを一時停止してみるのが重要な方法となるのです。もともとエポケーというのはギリシャ語で、古代ギリシヤの懐疑論者が哲学上の独断に反対することを意味しました。フッサールはこれを、判断を一切控える態度として再利用したのです。

それでは真の世界はどのようにして認識されるのでしょうか。実際に世界があるかないかはわからないとしても、私たちの意識作用そのものはなくならないでしょう(これをノエシスと呼びます)。ただし意識とは何かの意識である以外に存在しえません。つまり、「 \rightarrow に向かって」という形でしか存在しようがないのです。フッサールは意識作用にとっての意識の対象(あるいは意識内容、これをノエマと呼ぶ)を「志向的相関者」として位置づけました。そして、ノエマとノエシスがある志向性のもとで統一される現象を、一般に言うところの「認識」と考えました。

そして、エポケーの後、現れてくるのが純粹意識だといえます。意識は本源的に「 \rightarrow に向かって」という志向性を持っています。た

とえ「世界は存在する」という判断を中止したとしても、意識作用によっておのずと立ち上がってくるものが、私たちの本質的知覚です。そのとき外部からやってくるのが原初的な知覚素材です。これは現象学では「ヒュレー」といわれます。やはりギリシヤ語で「素材」あるいは質料の意味です。こうした素材によって、人間意識には本質を観取する能力があるとフッサールは述べるのです。

このような形でフッサールが提唱した現象学は、「世界とは何か」、「真理とは何か」という大命題自体には答えず、私たちの日常を構成している意識の作用から世界という地平を解き明かす日常性の哲学を打ち立てました。

創造の根源としての知識

フッサールの現象学の観点は、私たちが普通知識と呼んでいるもののプロセスを解き明かした点で、知識創造にとって重要な意味を持ちます。フッサールによれば、知識というものは、単に「ものごとについてよく知っていること」という辞書的な意味を持つものではありません。それを超えて、知識は私たちの意識の中に立ち現れてくる一種の確信、信念のようなものとしてとらえられるのです。

いわば知識とは、最初の段階では意識の外からの「知覚素材（ヒュレー）」の到来によって起こる、意識作用・意識対象の志向的な相関関係です。そこから、人間は複層的で超越的

な意味体系を作り出し、知識を心的に確立するわけです。厳密な意味での新しい知識の発見とは、エポケーを行い、世界をカッコ付けしたときに訪れる、一種の経験としてしか、ありえないのです。それが新しい知識の創造の始原となる、ということなのです。

フッサールは偉大な天文学者であるガリレオについて「彼は発見の天才であると同時に隠蔽の天才である」(フッサール「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」細谷恒夫・木田元訳)という有名な言葉を残しています。つまりガリレオは宇宙や自然を法則化することで、法則化される前の宇宙や自然を隠蔽したのです。本来、最初にあったのは法則化されていないあるがままの自然だったのですが、法則化された世界をわれわれは現実として意味づけして見るようになってしまふ。つまり、意味と現実の関係が逆転する、ともいえるでしょう。なんらかの知識が妥当性の高いモデルを構成してしまった場合、それは発見の手段になると同時に隠蔽の手段にもなりえるわけです。

したがって知識の創造においては、逆立ちした意味にとらわれることなく、あるがままの中から知識を生み出していく過程が重要です。実は、われわれの関心が意識して向かう前に、元来感覚素材の持っている意味がだんだんとまとまっていく状態があります。われわれはふだんあまり意識せずにいろいろな刺激などを受け取っています。それらが時間の経過によって相互に作用しあって徐々に意味が立ち上がってくる、ということがあります。フッサールはそれを受動的総合と呼びました⁽³⁾。そのような意味(言語)が立ち上がってくる場ではわれ

現象学的探究のステップ

エポケー (Epoche)	対象とする現象に対して： <ul style="list-style-type: none"> ● 判断の停止 ● 開放的・透過的のものの方 ● 注意力の継続 ● 内省的思惟
現象学的還元 (Phenomenological Reduction)	立ち現れる現象に直接的認識を行う (経験する)： <ul style="list-style-type: none"> ● 経験の質と意味の反芻 ● エポケーの後起きた事柄と自己内のイメージの記述
想像的变化 (Imaginative Variation)	経験の構造的記述： <ul style="list-style-type: none"> ● 想像力を駆使して経験を多角的に見て意味を抽出 ● 背後にある構造を見出し、その最適な例示の探索
総合 (Synthesis)	直観的にこれまでの作業内容を統合： <ul style="list-style-type: none"> ● 記述した経験と発見した構造を統一的に記述する (現象の経験の本質を全体として記述) ● 経験すべてを網羅することはできない (あくまで観察者個人の特定の場面での本質把握である)

(Moustakas, *Phenomenological Research Methods*.)

われの身体 (肉体) が大きな役割を果たします。それは、われわれの言語の「裏地として肉体が息づいている」⁽⁴⁾ ためだといえるのです。

ですから、知識創造のプロセスにおいては、現象学的な身体的経験 (暗黙知) にかかわるプロセスとして、共同化や内面化が重要な役割を担うのです。たとえば「顧客の立場に立って」という言葉は頻繁に経営の現場で用いられます。この言葉は、一種の現象学的な還元の手法が求められるものだとすることに気づくでしょう。他者の立場をリアルに追体験するためには、まず「私は見ている」という通常の見方をエポケーし、「私にもこのことが見えてくる道筋は

どういったプロセスをとるのか」と現象学的なものの見方をしなければならぬのです。こういった考え方に基づく現象学は、より実践的な方法論として、エポケー、現象学的還元、経験の記述、総合といったステップからなる前ページの表のような研究調査手法として展開されています。

社会学の知のアプローチ——構造・行為・意味・統合

以上のように、二〇世紀の社会科学は、閉ざされた実験室から出て、開かれた現実のなかで見えざるものを見る知として発達してきたものだといえます。その中で最も具体的に方法論を展開してきたのが社会学を中心とする領域でしょう。

現代の社会学者、P・L・バーガー(1929-)は、「人間の集合体は、自律的でしかもしばしば隠れた動力学によって動かされて」いて、「目に見える人間世界の体系の下には、社会学者の発見を待つ、隠れた、目に見えない利害構造や権力構造が存在する」と述べています⁽³⁾。以下では、このような視点から、社会学、フィールドワーク、現象学的社会学、知識社会学などの知の方法論のエッセンスを見ていきたいと思えます。その枠組みとなるのは、その見えざるものを構造、行為、意味のレベルなどから探る方法論で、さらにそれらを統合していくというアプローチです。

社会学における知のレベル（括弧内は代表的研究者）

構造（デュルケーム）

⇩

行為（ウェーバー）

⇒

統合（バーガー、ルックマン、ギデンズ）

意味（ホワイト、シュッツ）

⇩

〔1〕社会学——行為か構造か

実証的な概念形成の方法論

社会科学の中心を占めるともいっていい社会学の源流は、社会は個人の集合を超えた有機体のようなものであると説いたフランスのA・コント（1798-1857）に求められます。彼は、社会発展における三段階の法則を打ち立て、人類社会は「神学的な段階」、「形而上学的な段階」を経て、物や事柄の観察／仮説／実験／推理／検証という近代科学の方法によって、真の科学的、実証的な知識が獲得される。「実証的段階」に進歩した、という見方を唱えました。

その後、二〇世紀初頭に出たドイツのマックス・ウェーバー（1864-1920）、フランスのエミール・デュルケーム（1858-1917）、同じくドイツのゲオルク・ジンメル（1863-1918）（形式社会学によって社会学の専門化をすすめた）の三人によって社会学は専門的学問として体系化されたといわれています。

ここではつぶさにそれらを紹介するのが狙いでなく、いったい彼らは何を「見えざるもの」として掴もうとしたのか、そこに光を当てたいと思います。